The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 時間意識の多層構造と「多層時間モデル」 |
| Author(s) | 川島, 洋一 |
| Citation | デザイン理論. 2026, 87, p. 120-121 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/103740 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 時間意識の多層構造と「多層時間モデル」

川島　洋一　福井工業大学

## はじめに

今世紀に入り建築やデザインの分野では，「時間価値」に対する関心が高まっている。20 世紀における先進国では，都市の拡大と過密化が進み地価が劇的に高騰したという意味で「空間価値」が史上最高になった。しかし，現代では多くの先進国において人口の減少局面に入ったので，「空間価値」の高騰はピークを過ぎ，これまで陰に隠れていた「時間価値」への関心が高まったと考えられる。本研究は，21 世紀に入り顕著になった新しい時間意識に注目し，創造のための方法論として提唱することを目的とする。本発表では，関連する事象を考察の対象としながら議論を投げかけたい。

## 「時間価値」をめぐる言説

松岡由幸（2012）は，使えば使うほど価値が高まる製品のあり方について時間軸を通して考えることを提唱し，「タイムアクシス・デザイン」と定義した。内藤廣（2020）は，建築や都市の専門家 19 名を集め，多方面にわたる議論をまとめて出版した。両者とも環境に対する意識がパラダイムとなった今こそ，新しいものが優れているとみなす 20 世紀的な進歩主義を乗り越え，これまで漠然と指摘されてきた「時間がつくり出す価値」の本質を明らかにするべく意欲的な議論を重ねている。

松岡の研究では，「時間がつくり出す価値」の仕組みを分析し，理論化する提案が行われた。一方で，内藤らによる議論では，時間をめぐる多彩な視点が提供されて示唆に富むが，語られる時間概念の相互の関係性や議論全体に共通する方法論が不在なため，個別の議論の集積にとどまっている。

発表者は，建築における時間価値の重要性にいち早く気づき，2007 年に最初の問題提議を行った。この時点で「時間の多層構造」に着目する発想を発表したが，学界では孤立状態で研究テーマとしての有効性に自信が持てなかった。上述の二者の出現のおかげで，展開の糸口が見えたといえる。

## 時代変化の諸相と 21 世紀の時間意識

現代の事象は「複雑系」として説明されるように，多岐にわたる関係性に絡まる存在である。特に 20 世紀末に空間の実体を持たないインターネットが実用化し，さらに 21 世紀にスマートフォンが普及してインターネット接続手段をどこにでも持ち歩く行動様式が広がると，現代人は目の前にいない存在との関係性（電話やメール，LINE のようなアプリを使う）あるいは自分とは直接関係のないリアルタイムの出来事（ニュースや SNS の投稿など）までを常に意識しながら生活し，それがライフスタイルに大きな影響を及ぼすようになった。現代人は，過去の時代の人間よりも数多くの時空の異なる文脈と関係し，それらを意識する，あるいは無意識をも含むいくつもの時間軸の中で暮らしていると考えれば多くの現象に説明がつく。本研究では，この時間意識をモデル化し「多層時間モデル」と呼ぶ。こうした「時間意識」の変化は，過去の時代と現代とをさまざまな社会変化の諸相を比較することでより鮮明に認識できる。

19 世紀までは世界中で農業が主要な産業であり，主な移動手段は徒歩であった。自然から与えられ

たスピードで生きた19世紀までの時間意識をモデル化し，ここでは「等時間モデル」と呼ぶ。次に20世紀には機械生産や鉄道，自動車，航空機などの高速移動手段が普及し，人間の本来の能力を超えたスピードを次々と手に入れた。20世紀は，移動をはじめ生産や生活全般にかかる時間を短縮しようとする時間意識に特徴があり，これをモデル化して「時短モデル」と呼ぶ。また，20世紀には工業化により多くの商品を既製品として入手できるようになったので，商品の背後で生産に必要な時間が見えなくなった。これをモデル化して「無時間モデル」と呼ぶ。つまり20世紀を通して「時短モデル」により時間価値が高まり続け，その一部には「無時間モデル」も台頭した。さらに時間の効率化を目指すその先に，現代の「多層時間モデル」が生まれたと考えられる。

## 21世紀のライフスタイルと「多層時間モデル」

このような21世紀的な時間意識の萌芽は，すでに20世紀にその一部が確認できる。その最も身近な例は電気洗濯機である。20世紀前半まで，人は手で洗濯していた。これは「等時間モデル」そのものである。そこへ20世紀後半に電気洗濯機が登場し，人は洗濯をしながら他のことが同時にできるようになった。電気洗濯機はその後コンピュータを搭載して全自動となり，さらに全自動洗濯乾燥機へと進化を遂げた。21世紀では，洗濯にとって最も時間がかかる乾燥の工程までが機械を使って時間短縮され，しかもすべての工程を洗濯機から離れて放置できるようになった。これは「時短モデル」であると同時に「多層時間モデル」でもある。こうしてユーザーは見かけ上の時間が2倍になった。次に，現代の全自動掃除機の利便性は「時短モデル」ではなく「多層時間モデル」を使うことにより説明できるし，Zoomのようなアプリは移動の「無時間モデル」が出現したことを示している。さらに現代人に特徴的なライフスタイルに目を向ければ，単身者が増えた世相を背景にしたシェアハウスにおける疑似家族，副業が当たり前になった労働環境，関係人口や二拠点居住のような概念も「多層時間モデル」で説明できる。

## 時間意識の多層構造と「分人」概念

ここまで論じてきた「時間意識の多層構造」が成立するためには，人間の意識が分裂あるいは断片化し，同時に複数存在することが前提条件となる。この説明のために「分人」概念を援用することを試みたい。「分人」とは，それ以上分割不可能とされてきた「個人（individual）」を，さまざまな場面や文脈に応じていくつもの人格を使い分ける「分人（dividual）」とみなす概念のことである。ジル・ドゥルーズ（1990）によりはじめて明確に定義された。発表者は「多層時間モデル」を発案する2007年より前に，すでに複数の人格の存在を念頭に置いていたが，それはマーケティング研究者の三浦展の著書（2001）のおかげである。三浦は当時の若者文化の特徴を鮮やかに説明した際に，若者が複数の人間関係を自由に行き来する関係性と複数の人格の使い分けを指摘した。その傾向はスマートフォンが普及した現代ではさらに強まり，幅広い世代に見られるようになったと考える。

## おわりに

本研究は，「時間価値」が注目される建築やデザインの分野において，制作に役立つ基礎理論とすることを目指している。さまざまな現代的な事象を時間意識を軸に分析することにより，価値ある理論になるよう研究を進めたい。

## 追記

本発表は，意匠学会代表として出席した「デザイン関連学会シンポジウム」における発表内容に，その後の知見を加えて再構成したものである。

川島洋一，21世紀のライフスタイルと多層時間モデル，「デザインの可能性を考える」，デザイン関連学会シンポジウム，東北芸術工科大学，2024.